

再現させた。

形態特性で嚢胞様疾患は、その中に含まれる内容物によりエコーパターンが異なり、波形の不規則な配列が認められた。又膿瘍ではエコーレベルの不規則な棘状エコーが比較的、規則的に配列されているが、良性では低い途中迄の濃度波形であり、悪性では尖端の鋭い濃度波形で、基部も良性に比べて鋭角な立ちあがりを呈していた。

超音波診断装置の画像から得られる病態変化も肉眼下では判別がつけ難いが、濃度測定を行い比較することにより、特徴的变化をとらえる事が可能であった。

11. Obwegeser-Dal Pont 法を適用した骨格型下顎前突症の術後評価

——MKG による顎運動の検討——

高橋善男, 遠藤義隆, 川村 仁, 林 進武

(口腔外科 1)

曾矢猛美, 菅原準二 (歯科矯正)

骨格型下顎前突症に対する咬合改善手術のため Obwegeser-Dal Pont 法が主に用いられている。その術後には、顎態の変化および顎口腔機能の変化等が起こる。演者らは、顎口腔機能については、顎関節頭位の変動、咀嚼筋の活動性の変化等に関する報告を行ってきた。今回は、Mandibular Kinesiograph (MKG) による術前術後の顎運動の変化の検討を行ったので報告した。

被験者：Obwegeser-Dal Pont 法を適用した骨格型下顎前突症 12 名(男子 1 名, 女子 11 名)。手術時年齢は 16 歳から 23 歳。

方法：下顎運動記録を Jankelson の方法に従い MKG で記録した。記録の採取時期は全症例とも術前矯正終了時および術後矯正終了後 6 ヶ月時であった。矢状面・前頭面よりの習慣性開閉運動軌跡の変化、垂直運動速度図形・前頭面運動よりの急速開閉運動軌跡の変化、下顎安静位の安定性を定性的に顎運動パターンとして検討した。また、前方・側方滑走運動路の角度の変化を検討した。

結果：術前においては、習慣性開閉運動時の開閉路交叉や軌跡の非対称等が多く認められた。また、急速開閉運動時に不規則な動揺やノッチが認められ、顎運動の円滑さに欠ける例が多かった。さらに、若干名において、下顎安静位の動揺が認められた。しかし、術後は犬歯・小白歯誘導による側方滑走運動の均一化と前歯部誘導による前方滑走運動の均一化が得られた。

また、習慣性開閉運動における軌跡の動揺の減少と急速開閉運動における円滑化、下顎安静位の安定化が得られた。

12. 最近 8 年半の第一口腔外科におけるエプーリス患者の臨床的、病理組織学的検討

寺澤久全, 小松多賀子, 亀井達哉, 篠木邦彦

佐藤隆吉, 山田和祐, 田代直也, 遠藤義隆

川村 仁, 田中広一, 丸茂一郎, 藤田 靖

林 進武 (口腔外科 1)

猪狩俊郎, 山口 泰 (口腔外科 2)

大久保勉 (口腔病理)

今回我々は、昭和 50 年 11 月より昭和 59 年 4 月まで 8 年半の間に、当科を受診し、エプーリスと確定診断された 82 例について、臨床的、病理組織学的検討を行い報告した。

年度物症例数では昭和 57 年が 16 例で最も多く、平均 9.6 例であった。

主訴としては、歯肉の腫瘍が大部分で 91.5% を占めた。

男女比では、男性 30 例, 女性 52 例で 1: 1.7 で、女性に多かった。年代別では、20 代に 18 例, 40 代に 20 例と、あわせて 46.4% を占めた。

自覚してから来院までの期間は、3 ヶ月以上 6 ヶ月以内が 16 例と最も多かったが、30 数年というものもみられた。

当科初診までの処置回数では、未処置のものが、大部分で 91.5% であった。

発生部位でみると、上顎 40 例, 下顎 42 例でほとんど差はなく、上顎では前歯部で 19 例, 下顎では小白歯部で 18 例と多かった。また唇・頬側が、舌・口蓋側の約 1.5 倍であった。

誘因と思われるものでは、妊娠 10 例, 不良補綴物 4 例で、半数以上が不明であった。

臨床的所見では、大きさは、示指頭大から拇指頭大までのものが、最も多く半数以上を占め、基部の形態は有茎性で、色調は赤色、表面が平滑、硬さが弾性硬のものが多かった。

病理組織学的には、肉芽腫性 36 例, 線維性 25 例, 血管腫性 3 例, 骨形成性 15 例, 巨細胞性 1 例で、肉芽腫性と線維性の移行型と思われるものが 2 例みられた。

処置では、摘出が大部分で、他に凍結療法 2 例, レーザー照射 1 例もあった。